



整形外科新シリーズ

第5回

北アルプス医療センターあづみ病院 整形外科医長

肩関節治療センター 松葉 友幸

腱板断裂の診断、治療について

● 腱板断裂の診断

診察と問診に加えて画像検査にて行います。それぞれの検査に利点と欠点があるため選択して行っています。

MR-I..腱板断裂の検査に必須です。腱板が切れている様



子、筋肉の萎縮

の様子など多くの情報があります。

ドーナツ型の狭い機械の中に20分入り撮影するため、閉所恐怖症の方はできません。

肩関節造影検査..肩関節内に造影剤を注射した後に、腕を動かしながらレントゲンを撮影します。MR-Iでわからないような小さい断裂までわかります。動かしたときに

肩に異常があるかどうか判断できます。稀に感染、アレルギー反応を起こすことがあります。

超音波検査..5cm程の機械を肩に当てて行います。腕を動かしながら観察することができます。痛みもありません。機器の進歩によりきれいに見えるようになりましたが、それでも不鮮明なため確定診断はできません。

● 腱板断裂の治療法

腱板断裂は加齢による変化と外傷により起ります。

高齢になつてくると知らない間に切れていることもあります。年齢と共に増える疾患で、一般住民の方を検査した報告では50歳以下では5%でしたが、60歳代で25%、70歳代で45%の方に腱板断裂があつたそうです。しかしそのすべての人には症状があつたわけではなく、65%の人は肩に関する症状の訴えがなかつたそうです。その方たちはどうして症状がなかつたかと言ふと、利き手と反対側であまり使つていなかったこと、肩周囲の動きが良好だつた

こと、残つて いる腱板で筋力が保たれています。

腱板は一度断裂してしまうと自然経過で元に戻ることはできません。手術によって治してしまうことが一番ではあるのですが、手術をしなくても、急性期がすぎて炎症が治まる と痛みがなくなり、日常生活に困らなくなることがあります。しかし、良くなつたと思つてそのままにしておくと徐々に断裂の大きさが大きくなり、力が入り難くなることがあります。

以上のことから、腱板断裂はすべて手術するものではありません。しかし手術しなければ元通りにはならず、腕を挙上する筋力がもどりません。そのため患者さんと相談し、手術を決めて います。目安としては80歳以下で活動性の高い方、リハビリしても筋力低下がある方、大きい断裂のためこれ以上大きくなると修復できない方、切れた断端がひつかかるような痛みが強い方が主な手術適応です。